

第4学年 社会科 学習指導案

菊池市立旭志小学校

教諭 柴田 成懂

1 単元構想

単元名	ごみはどこへ（教育出版 P28～49）		
単元の目標	ごみの処理について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え 学習したことを社会生活に活かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を持つようとする態度を養う。		
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①ごみを処理する事業は、衛生的な処理や資源の有効利用ができるよう勧められていることや、生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。	①菊池市にある廃棄物処理に関する事業の様子を捉え、その事業が果たす役割を考え、表現している。 ②給食に関わる人の願いを聞き、むだを減らすための方法について考え、残さず食べていこうとしている。	①学習したことをもとに、ごみを減らすために自分達が協力できることを考えたり、選択・判断したりして、自らごみの適切な処理や再利用に協力しようとしている。 ②食品ロスを減らすため、食生活をどのように改善したらよいかを考え、実践しようとしている。
単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
日本国内の食品ロスや学校給食の残食がある事を理解することができ、食べ物のむだを減らすための方法について考え、残さず食べていこうとすることができる児童			
単元を通じた学習課題（単元の中心的な学習課題）		本単元で働かせる見方・考え方	
食品ロスが社会にどんな影響を与えるのかを知り、給食をつくったり運んだりしてくださる人の願いに気付くとともに、学級で残食を減らすための工夫を考えよう。		食品ロスの問題を、社会の仕組み・環境への影響・人々の願いの三つの面から関連付けて考え、自分たちの行動を見直したり考えたりする。	
指導計画と評価計画（9時間扱い）			
次	時間	学習活動	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」
1	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみの種類や分別の仕方、収集のしくみや、ごみ処理施設の働きや処理の流れを理解する。 ・ごみを減らすための地域の工夫や、再利用の取組を理解する。 ・実際の施設や働く人の様子を見て、理解を深める。 ・ごみ問題を自分事として捉え、よりよい生活のためにできることを考える。 	【知—①】 （ワークシート） 【思—①】 （発言・ノート） 【主—①】 （ワークシート）

2	2	<ul style="list-style-type: none"> 旭志小から出る生ごみ（食べ残し）がどのように処理されているかに関心を持ち、食品ロスがごみ処理と深く関わっていることに気付く。 自分たちが普段食べている給食はどこからやってくるのか、そしてどのように作られているのかについて考える。 	【主一①】 （発言、ノート） 【思一②】 （発言、ノート）
3	2	<ul style="list-style-type: none"> 栄養教諭・調理員さんなどの願いやメッセージを聞き、その思いに応じて自分たちにできることを考える。 食品ロスの課題解決に向けて、学級としてできる取り組みを考え、実際の行動につなげようとする態度を育てる。栄養教諭・調理員さんへの感謝の気持ちを手紙で伝える。 	【思一②】 （発言、ノート） 【主一①】 （発言）

2 単元における系統及び児童の実態

学習指導要領における該当箇所（内容、指導事項等）	
<p>本単元は、学習指導要領第4学年社会科内容（2）ウに示される、ごみ処理事業の仕組みと役割を理解させる学習を基盤とし、特に生ごみや食品ロスがどのように処理され、地域社会や環境にどのような影響を与えるのかに着目しながら、関わる人々の工夫や願いを捉え、よりよい暮らしに繋がる行動を考えさせることを目的として設定している。</p>	
教材・題材の価値	
<p>本教材では、私たちの生活から出るごみが、地域の人々の協力と多くの仕事の積み重ねによって計画的に収集・運搬され、適切に処理されていることを理解させることができる。また、ごみの種類や処理の仕組み、処理施設の働きや、ごみ処理に携わる人々の工夫や願いを知ることによって、地域の環境を守るうえでごみ処理事業が果たしている役割に気付かせることができる。さらに、本教材を食育と関連付けることで、給食の残食や家庭での食品ロスの問題を自分事として捉え、食べ物を無駄にしない態度を育てるとともに、よりよい生活の在り方について主体的に考える力を育成することができる教材である。</p>	
本単元における系統	
<pre> graph TD A[3年 「くらしを守る」] --- B[4年 「ごみはどこへ」] C[4年 「水はどこから」] --- B D[4年 「わたしたちの県のまちづくり」] --- B B --- E[5年 「わたしたちの生活と工業生産」] </pre>	
児童の実態（単元の目標につながる学びの実態）	
<p>本単元の内容については、子どもたちはすでにクリーンセンターでの社会科見学を終えており、日常のごみがどのように集められ、運ばれ、処理されているのかという基本的な流れについては理解してい</p>	

る。しかし、その理解は「ごみ処理のしくみ」を知識として捉えている段階にとどまっており、自分たちの生活と処理のしくみを結び付けて考えることが十分にできているとは言えない。また、学校生活では、栄養教諭から給食の栄養や食べ方について話を聞く機会は定期的にあるものの、苦手な食べ物が出ると「減らす」「残す」ことを当たり前の選択としてしまう児童も多く、食品ロスを自分事として捉えられていない実態がある。給食に関わる人々の願いや工夫に触れる機会も限られており、日々の残食が生ごみとなって地域のごみ処理に負担を与えているという視点は育ちにくい。そこで本単元では、見学で得た「ごみ処理のしくみの理解」を基盤としつつ、自分たちが日常的に出しているごみ、とりわけ給食の残食が地域社会の中でどのように扱われているのかに焦点を当てて学習を深める。さらに、給食に携わる人々の思いや願いを知ること、食べ物の大切さや食品ロスの問題を自分事として捉え、「少しだけ挑戦してみる」「自分に合った量を考える」などの行動変容につなげることを目指す。

3 指導にあたっての留意点

- クリーンセンター見学で得た知識を生活と関連付け、残食が生ごみとして地域にどのような負担を与えるかを理解できるようにすることで、自分ごととして考える姿を育てる。
- 本校の栄養教諭をゲストティーチャーとして招き、食品ロス削減の取組、給食に込められた願いについて話をさせていただくことで、責任をもって行動しようとする意識を高める。
- 学級で「自分たちにできる残食削減の取り組み」を出し合い、班や個人で取り組む内容を選択させ、単元後半に実際の行動につなげることで、学習が生活改善に直結していると感じられるようにする。
- 単元のまとめでは、自分たちで考えた残食を減らす取り組みを発表したり、給食に携わる人への感謝の手紙に思いをまとめたりするなど、学んだことを誰かに伝える活動を通して、学習内容の定着と行動への意欲づけを図る。

【ESDの視点から課題発見と自己実現の場となるSDGsの取組】

4 ESDとの関連

○本単元で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- ・相互性：わたしたちが出すごみ、（給食の残食）は、生ごみとして地域のごみ処理の仕組みや環境への負担と深く関わっており、日々の小さな行動が社会の仕組みとつながっていることに気付かせる。
- ・有限性：ごみや食べ物、資源には限りがあることを踏まえ、無駄にしない使い方を考えることは、将来の生活を守るためにも大切であることに気付かせる。
- ・責任性：給食を作る人、ごみを収集する人、地域の環境を守る人など、多くの人々の協力によってわたしたちのくらしは成り立っている。児童一人一人の残食を減らす行動が、学級・学校・地域全体のごみ削減や環境保全につながっていくことに気付かせる。

○本学習を通して育てたいESDの資質・能力

- ・未来像を予測して計画を立てる力

このまま食品ロスや残食が増え続けたら、地域のごみ処理や環境にどのような問題が生じるかを

考え、自分たちにもできる残食削減の取組を計画し、日常生活の中で行動に移すことができる。

- ・他者と協力する力

給食に携わる人、ごみ処理に関わる人、学級の仲間など、多くの人々の願いや役割を踏まえながら、残食を減らすための取組を周囲の人と協力して進めることができる。

- ・進んで参加する態度

自分がよいと思った食品ロス削減の取組や、学級で話し合っただけの活動に、主体的に参加し、食べ物を大切にしようとする思いや行動を継続していくことができる。

○価値観

- ・世代間の公正

今のわたしたちが出すごみや食品ロスを減らし、環境への負担を小さくすることで、次の世代が安心して暮らせる、よりよい地域の環境を残していくことが大切である。

○達成される SDGs

- ・ 12（生産と消費）・ 13（気候変動に具体的な対策）